博 士 論 文 要 旨

在宅医療分野で活躍できる薬剤師の養成を目指した研修システムの開発と実施

小林篤史

超高齢化社会を迎えた現在、終末期を自宅で過ごしたいと希望する患者の割合は多く、在宅医療の推進が不可欠となっている。在宅医療は多職種の連携で提供されるが、調剤中心の対物業務を行ってきた薬局薬剤師は、対人業務である在宅医療に貢献できていないとの評価がある。そこで、本研究では、在宅医療に関する薬剤師の業務実態を調査するとともに、在宅医療の現場で活躍できる薬剤師の養成を目指して、薬剤師、薬学生を対象とした研修プログラムを開発、実施し評価を行った。

1. 在宅医療に関する薬剤師業務の実態および患者ニーズのアンケート調査

在宅医療を推進するための薬剤師の課題を明らかにするために、在宅医療に対する薬剤師業務の実態と、患者のニーズをアンケート調査した。在宅医療の実施率は、調査した薬局の約 50%であった。在宅医療を積極的に行っている薬剤師は、患者に薬を届けることと、患者が薬を服用しやすくする工夫を行っていた。また、在宅医療を妨げる要因は、薬剤師の人材不足がもっとも大きかった。薬剤師は、調剤業務の効率化を行い、患者ニーズに対応した在宅医療の業務を行うことが必要であると考えられた。

2. 薬学生がスタッフとして参加した薬剤師在宅医療技術研修会の開催とその評価

薬剤師が在宅医療で必要な技術の修得を目指して、薬剤師在宅医療技術研修会を開催した。研修は、バイタルサイン、褥瘡、無菌製剤、血液検体測定の 4 項目を行った。事前研修を受けた薬学生がスタッフに加わった。研修に対する受講者の満足度は全項

目ともに 5 段階評価で 4 以上が 90%以上を占めた。スタッフ大学生の研修前と比較した研修後の理解度は全項目ともに 4 以上が 90%以上を占めた。研修後には研修した技術を業務で実践した事例が多く報告されており、本研修の有用性が確認された。

3. 薬局薬剤師の無菌調製経験の実態とトレーナーを用いた無菌調製研修の効果

薬局薬剤師の無菌調製経験の実態を調査し、陰圧操作トレーナー（バイアル内の圧力を音で告知）を用いた無菌調製研修の有用性を評価した。調査対象 79 人のうち無菌操作の業務経験がある薬剤師は 16.5%であった。研修は講義、実習、トレーナー実習の順に行った。研修者の無菌操作の基本知識、手順の理解度は実習後に有意に上昇した。陰圧操作の手順の理解度は、トレーナー実習後に有意に上昇した。陰圧操作は抗がん剤調製時の調製者への暴露防止に不可欠であり、本研修の有用性が示唆された。

4. 薬学生に対する在宅医療研修プログラムの開発とその評価

薬学生を対象とした多職種が指導者となる在宅医療研修プログラムを開発した。研修は在宅医療の総合診療所を拠点に実施し、期間は 2 週間、方法は薬学生が多職種と患者宅・施設に同行する on the job training とした。研修生は医師同行、看護師同行、薬剤師同行を行い、患者宅・施設では、医療・介護の多職種から指導を受け、地域交流、看取りも体験した。研修後のレポートでは、在宅医療のキーワードに生活、信頼関係、多職種連携、他職種の役割、専門性の発揮、情報共有、死が抽出され、在宅医療での生活の支えの重要性と薬剤師の役割について理解が深まったことが確認できた。

以上、薬剤師の在宅医療への業務推進の必要性を明らかにし、在宅医療で活躍できる薬剤師の養成を目指して、薬剤師、薬学生を対象とした研修プログラムを実施した。その結果、薬剤師を対象とした技術研修では研修者、スタッフ薬学生の理解度が向上すること、薬学生を対象とした研修では、多職種連携の必要性と患者生活の支えの重要性の理解度が向上することを明らかにし、研修プログラムの有用性が示された。

論文審査結果の要旨

氏名（本籍）	小林　篤史　　（　京都府　）
学位の種類	博士（薬学）
学位記番号	甲　第　１８５　号
学位授与年月日	令和２年３月１０日
学位授与の条件	学位規則第４条第１項該当者
学位論文の題名	在宅医療分野で活躍できる薬剤師の養成を目指した研修システムの開発と実施
論文審査委員	（主査）　足立　哲夫
	（副査）　臼井　茂之
	（副査）　林　　秀樹

超高齢化が進む日本において在宅医療のニーズは今後さらに高まると言われているもののその在宅医療の現場において薬剤師は十分に活躍できていないと指摘されている。本研究では、在宅医療の現場で活躍できる薬剤師の養成を目指して、薬剤師や薬学生を対象とした研修プログラムを開発、実施しそれを評価した。岐阜県薬剤師会所属薬剤師を対象にした薬剤師在宅医療技術研修会には事前研修を受けた薬学生がスタッフとして加わり、バイタルサインや褥瘡などの項目の研修を行ったが、受講生や薬学生の満足度は非常に高く、この研修内容を在宅医療業務の開始に活用した事例もあり、本研修の有用性が確認された。一方、薬学生を対象とした２週間にわたる在宅医療研修プログラムでは医療・介護に携わる多職種が指導者となり、患者宅・施設訪問に薬学生が同行し、薬剤師の在宅医療業務や多職種との連携を体験するとともに、カンファレンスや地域交流への参加、看取り体験もあり、受講生には在宅医療による患者の生活の支えの重要性を理解する有用なプログラムであることが明らかになった。

以上、本研究は、在宅医療で活躍できる薬剤師の養成を目指して開発した研修プログラムの体験が多職種連携在宅医療による患者生活の支えの重要性の理解に有効であることを明らかにしたもので、博士（薬学）論文として価値あるものと認める。